

## 蟲愛づる日本人

一二三朋子

桂川クラブ主催の自然觀察會にて山繭蛾（やままゆが）の翅見つけたり。山繭蛾は幅五センチを超ゆる翅を四枚持ち、おのおのの翅には目の如き紋あり。翅を左右にひろぐれば十センチを超ゆる大なる蛾にて、蟲を嫌ふ者にはいとも恐ろしげなる蟲なり。なれど、蟲愛づる桂川クラブ諸氏、些かも恐るるなく、落ちたる翅を熱心に探し、嬉々として拾ひ集め、成蟲の形に戻さむと石の上に並べをりたり。

『堤中納言物語』所收の「蟲めづる姫君」の愛でし烏毛蟲（かはむし）も、蛾の幼蟲ならむや。仕ふる女房達の怖ぢ惑ふを尻目に、姫は烏毛蟲を掌にのせ、成長する姿を見守り給ひきといふ。

「蟲めづる姫君」ならずとも、日本人なむ世界にも珍しき、蟲愛づる民ならむ。『万葉集』四五〇〇首余りの歌中、蟲の登場せる歌三十首あまりあり。また、小林一茶の作りし俳句のおよそ一割には蟲詠まれをり。

蟲の音を愛づる風雅なる習慣もあり。江戸時代には蟲売りといひて、鈴蟲や蟋蟀（こほろぎ）を売る商ひもありけり。京都の「鈴蟲寺」は一年中「鈴蟲」の音を聞くこと可なりて人氣のある寺なり。

他にも、甲蟲（かぶとむし）・鍬形（くはがた）の相撲大會や、飛蝗（ばった）飛ばし大會など、子供も大人も熱中し興する遊戯も各地にて今なほ盛んなり。桂川の土手には、夏の終りになれば、捕蟲網を手にする親子見ること屢々なり。昆蟲採集ならむ。我も小學生の折、昆蟲採集を夏休みの宿題に提出せしことありき。

NHKのラジオ番組「子ども科學電話相談」にては、相談の内容により植物・動物・恐龍などと並び「昆蟲」の區分あり。子供たちの蟲に対する關心の高さの表れならむ。

蟲の童謡や歌も数多あり。「夕焼け小焼けの赤とんぼ」「蝶々蝶々 菜の葉に止まれ」「あれ松蟲が鳴いてゐる」「蜻蛉の眼鏡は水色眼鏡」「ぶんぶんぶん 蜂が飛ぶ」「蟻さんと蟻さんがこつつんこ」「ほーほー 螢來い」「でんでんむしむし 蝸牛（かたつむり）」「黄金蟲は金持ちだ」「蚯蚓（みみず）だって 螻蛄（おけら）だって 水馬（あめんぼ）だって」、「赤、黄色の衣装を著けた 天道蟲がしゃしゃり出て」などなり。

蟲を使ひたる慣用句も多し。「蟲の居所が悪い」「蟲がいい」「蟲も殺さない」「蟲が好かない」「腹の蟲が収まらない」、また諺に「蓼喰ふ蟲も好き好き」「虻蜂取らず」「飛んで火にいる夏の蟲」「一寸の蟲にも五分の魂」など、枚擧に暇なし。かかる日本語の表現を外國語に譯さむとせば、全く異なる言葉に依るにあらざば意味を傳ふことを得ず

といふ。

蟲への親しみや慈しみは、小さきもの、弱きもの、儂きものへの憐みや共感、さらには、自然との共感や一體感をも育むものならむ。『古今和歌集』假名序に「花になくうぐひす、水にすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれかうたをよまざりける。」とあり。蟲を愛づる日本人の感性こそ、世界平和の礎となる精神的基盤ならめ。

(令和七年十一月十二日受附)